

ゝに所謂内外生活の統一は得られるのである。吾人は本化の宗教的生活によりて、偉大ある力と悦樂とを得て、恣に靈的欲望を満足させなければならぬ。

かたる花

猪口海靜

古今東西老若男女、花に對するの愛情に別あらず。兒女は幼き手に弄するを好み、英雄を以て世界の花と云ひ、敗殘の死者も花を以て祭らる。所有物を目して之れを美と感せば、花の形容を以て迎へざるなし。然り、夫れ花は、美の標本あらばなり。吾輩に目に見て、其の美を感ずるのみにあらず。花は實に宗教道德の好教訓として、古來聖者の示せるもの少なからず。其の詩歌にいそしむ人、之れを以て好詠題とあすは人よく之れを知る。若し人生に花なからしめば、世は如何に寂寥に、沒趣味に果てん。いふ世の文學美術は、亦其

の美の大部を失するに至らん。人生の花に於ける、如是親密の關係あり。

古來美人の異名として、解語の花といふ。蓋し花に固有の愛嬌ありて、人の真情を傳ふる處に、言語の用をなすありて、無量の感を溢るゝものなくんばあらず。『往時渺茫誰と共に語らん、閑庭唯不言の花あり。』とは、敦光の詩言あり。然れども、之れ不言の花は、不言の言を爲すに非ずや。閑庭、豈に昔を語らざらんや。彼の少女は、太田道灌をして、『山吹の實の一つだに無き』を言はしめしにあらずや。野末の徒花狂花に至るも、人の能く言ひ得ざる言葉を、良く傳ふる力あり。解語の花、豈美のみならんや。梅花の雪を犯して咲くは、古來堅忍不拔の氣象にたとへ、又婦人の貞操に比し、櫻の潔く散るは、武士の身命を惜しまざるに比せらる。本居の『しきしまの大和心』と歌はれしも、そを代表せるものあらん。『上を思へば限りおしと下を見て咲く百合の花』の俗謠も、誰かその謙讓の徳を思はざらん。又花は諸行無常

の説明として、古來の宗教家は、之れを言ふ。されど人々其の感想同じからず。予は花を見て無常を感じることが如きは、極めて狹隘ある一時的見解にして達觀にあらず。赤染衛門の『去年の花散りにし花は咲きにけりあはれ別れのかゝらましかは。』と、人は總ての花によりて所謂永生を學ばずんば何んぞ花の眞價を知れるものといふを得ん。嗚呼人生花によりて心を安んずるを得るべし。花亦人を得てますゝ美也。人亦花によりて後人の私淑を促す、管公の梅花本居の櫻花之れなり。されど未だ眞に花に迎へられたる人にあらず、花あり渥中の汚穢に清淨無染の姿を顯はす蓮華即ち之れなり。蓮華に爲蓮故華、花開蓮現、花落蓮成の三義あり。所謂蓮の花の開くは蓮の實の爲めあり。花の開く時は實現はれ、咲きし花散りて實殘るなり。(之れ一々法門あること推して知るべし)又蓮華の泥中に生じて泥に染まざること、衆生煩惱の心より佛身を成ずるに適ふ。花果同時は因果不二あり。世間所有花は如是德を備へず、梅櫻の美花も散り

て後實なる、況んや餘の徒花狂花に於てをや。然るに世間の蓮華は夏のみ開きて常に開かず、汚渥の池に生じて陸に生せず、剩へ風に揉まれ、浪に沈み、氷に閉ぢられ、光に萎む、されど獨り佛性の蓮華は然らず。三世無邊の花なれば春夏秋冬常葉なり。徧一切の花あれば六趣三有に遍く開き、善惡不二の花あれば惡業の厚薄を選ばず、邪正一如の花なれば煩惱の游泥にも染まず、十惡の風にも揉まれず、五逆の浪にも流されず、紅蓮の水にも閉ぢられず、焦熱の炎にも萎まざるなり。斯の如き貴き佛性蓮華を、上は有頂より下那落の衆生悉く持ちながら、無明の酒に酔ひ、煩惱の闇に迷ひて、遂には身中に光ある蓮華と我性の眞如を知らざる事、貧女が家の寶藏を忘れ、蛟龍が身内の玉を寶と知らざるが如し。即ち佛性は雲中の月、土中の金、石中の火、木中の花の如し。隠れて見えざると雖も、佛性の蓮華は衆生心中に宛然として納め持てり。斯かる深大なる意義ある花は暫く世間の蓮華として、今を去る六百九十五年前、佛使た

る聖者は且らく旃陀羅の子として日本國に降誕せしませし大聖日蓮を迎へたり。

經あり。今を去る三千年前、印度の王族に眞理の人格化せる、佛陀出世の本懷として説き出されし宇宙の大眞理、世界倫理の大王末法五濁の大燈明即ち法華經之れなり。此の經亦此の人によりて豫言を確され、末法當今の闇の中に濟ひの網の手を下されたり。

夫れ法華經の開說者は釋尊あり。判釋者は天台智者なり。之れを輔整せしは傳教なり。而して最後に之れが實行者として現れたるは即ち聖者日蓮上人其の人あり。冬夏の寒熱、春秋の花月、人は惰眠するも自然は常住に活動す、法華色讀の活ける聖者は、扶桑東端安房の國小湊に呱呱の聲をあげ玉ひし時、末法五濁の衆人は、此の聖子に絶對の祝意を表現することを知らざりき。されど自然は如何に、此の旃陀羅の伏屋に人の子として生れたる聖者に對して、偉大なる意義ある蓮華を以て歡迎せり。如月の梅は如何に妙法を表現するに足

らざればとて、此に自然は大英斷にも七月からざれば咲かぬ蓮華をして、二月の寒天に、而かも渥池からざる海邊に咲かしめき。嗚呼！聖詩と言はんか。聖劇と言はんか。あらゆる眞善美を盡く集めたる蓮華に迎へられたる聖者！聖者は建長五年立教開宗旭日が森に天日を對告とし、文永六年廣宣流布を念願して、法華一部を靈岳の山腹に埋め、全八年の相州龍の口の波、宗祖一期の正宗てふ北海寒山佐渡の雪、最後流通の身延の月に天地の大文字を織りなせる聖書は、げに大聖釋尊の豫言をして確實にせしめたるあり。靈長池上に移られし聖者は弘安五年十月一化盡きて安詳として非滅現滅の大涅槃に入り王ひぬ。其の降誕に當り、如月の寒天に海中蓮華の大奇瑞を以て迎へし自然は、こゝにも亦大奇瑞を現して聖者の入滅を送るに櫻花を以てせりき。げに夫れ櫻花は日本國を表現し、蓮華は以て妙法の不思議を現じ、清きこと蓮華に過ぎん。美しき事櫻に勝るべきや。日本國民は須らく清き蓮華と美しき櫻花とを以て理想と

すべし。是が日蓮主義の特色なり。見よ！聖者の生は蓮華に迎へられ、死を櫻花に送らる。之豈に聖日蓮が大自然をして、日本國民性の精華を花に托して我等同胞に語らしめしにあらずや。嗚呼何んぞ花不言なる。

趣味と生活

望 月 嘯 月

吾人が生活上缺く可からざるものは、生計である。世の中に活きて活動する第一の基礎は、衣食住の三つである。此の三者何れを缺いても、吾人の生活は成立せぬ。否社會に立つて活動して行けぬ。茲に於てか吾人が共同生活の缺く可からざることを知ると共に、他方又生存競争の逃るべからざるに至るは、之れ自然の状態である。而も一方文物の進化は、長足の發達を示せる今日、生存競争は益々激烈となり、之れに伴ふて生ずる社會道德の荒廢は、愈々慘澹たる景況に至るは何ぞや。

自己が利欲の前には名譽なく、地位も顧みず、生存競争の巷に血眼を以て立てる。吁是れ文明國民の一大缺陷を暗示せるに非ざるか。吾人又同じく此の渦中にありと雖も、而も何等趣味なき生活に於ては、絶對に其の價値を認むる能はず。貧者にもあれ富者にもあれ、趣味なき生活をたどるは猶盲人の山水風月に對するが如し。彼の有名なる哲學者エピク羅斯の言に聽け、『我に一のパンと水とだにあらば、幸福に於てフォイス神と競ふをも辭せず。』と。即ち彼が理想生活としては、安らかに楽しい生活を送らんとするにある。

若し然らば、彼が眼中必ず富者を以て幸福とし、貧者を以て不幸の者逆境の人とは見ざるべし。要するに尊き吾人か一生を齟齬として我利一點張りに終らんは、萬物の靈長たる人間の尤も恥づべきものに非ずや。『人生五十年二十五年は寢て暮す』諺を知らざるか、百萬の富みを積むとも冥途の旅に何かせん。寧ろ如かず、千金の利を求めんより一善の利を得んには。兼行法師言はずや『名利に